獅子のごとく

佐々木 守

集英社

子のごとく

々木 守

集英社

獅子のごとく

昭和五十三年八月　五日　初版印刷
昭和五十三年八月十五日　初版発行

著　者　佐々木　守
発行者　堀内　末男
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇　〒一〇一
電　話（〇三）二三〇―六一七一（販　売　部）
印刷所　廣済堂印刷株式会社
検印廃止・乱丁落丁はお取替えいたします。

©1978 *M. SASAKI* *Printed in Japan*
0095-783008-3041

目次

津和野の神童　7
東京大学　24
留　学　39
乃木と鷗外　64
エリス　85
結　婚　98
小　倉　113
日露戦争　130

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

観潮楼の人 149
大逆事件 174
乃木大将の死 195
獅子殆れる 220

装幀　高塚省吾
編集協力　尚企画

獅子のごとく

津和野の神童

一

文久二年（一八六二）。

日本は維新の動乱の最中にあった。

水戸浪士を中心とする尊攘派の武士七名が江戸城坂下門外に老中安藤信正を襲って負傷させた坂下門外の変。横浜付近の生麦村で、薩摩藩士が騎馬のイギリス人を殺傷した生麦事件などが発生して、国内は騒然としていた。

日本は、新しく生まれ変わる前のはげしい陣痛に見舞われていた。

その文久二年が明けて間のない一月十九日。ここ石見国鹿足郡津和野町田村横堀にある武家屋敷で、ひとつの生命が誕生しようとしている。

清子は一室に座し、目を閉じて気持ちを落ち着けながら、産室の気配を窺っている。男児であろうか、女児であろうか。どちらでもよい、丈夫な孫が生まれてくれさえすればよい、と清子はひたすら願った。

この森家は十代以上にわたって津和野藩主亀井家の典医をつとめてきた家柄である。その後を継ぐべき子が、いま生まれ出ようとしている。清子は座っていることができず、立ち上がって神棚に灯明をあげて手を合わせた。

人の気配に目を開けると、いつのまに入って来たのか、婿の静男が緊張した表情で突っ立っている。

「心配せんでもええ」

清子は自分にもいい聞かせるように、押し殺した声でいった。

「峰子は間違いのうええ子を生んでくれますじゃ」

「私もそれを祈っとります」

静男が声を震わせていったとき、高らかな産声（うぶごえ）が聞こえてきた。

「やった、やりましたわい」

静男が悲鳴（ひめい）のような声を発した。

「元気な声じゃ、これは男に違いあるまい」

清子と静男は廊下へ走り出た。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

峰子は、母親になった喜びと誇りに満ちた眼差しを輝かせて清子と静男を迎えた。
生まれたばかりの赤ン坊が産湯をつかっている。
「男か女か」
清子は息をはずませて聞いた。
「男の子ですよ、お母さま」
「男じゃったか」
清子は、咽喉の奥から熱いものが突き上がってくるのを覚えた。
森家ではここ二代ほど婿養子が続いていた。清子と綱浄との間にできた男の子が夭折したため、娘の峰子に婿をとることにして静男がきた。
早く初孫の顔が見たいと話していた綱浄に死なれて、清子の歎きは大きかった。そこへ峰子の妊娠である。
〝これはお祖父さんの生まれ変わりじゃろう〟
清子は、生まれてくる子に夢を託した。それが男の子であったから無精に嬉しかった。
盥の中の赤ン坊は、泣き止んでじっと宙を見ている。何かを凝視しているふうにも見える。
「おうおう、利発そうな顔をして。祖母さんの顔が分るのかのう」
清子は赤ン坊の澄み切った眼差しに惹き込まれそうになった

「お母さま、生まれたばかりの赤ン坊は目が見えないんですよ」
峰子が苦笑するが、清子は素直に引っ込んではいない。
「いいや、賢い子は目は見えんでも、心で見ることができますじゃ」
晴れやかな賑いが森家を包んでいる。
山間の城下町津和野に一瞬の平和が訪れたかに見えるが、隣の長州は大揺れに揺れている。その余波がひしひしと押し寄せている。
歴史が大きく変わろうとしているこの動乱の世に生まれてきた赤ン坊は、不思議な運命を担っているといえばいえよう
森家の嫡男は林太郎と命名された。後の森鷗外である。

″森家に八十年振りに授かった男の子じゃ″と清子が口癖のように自慢する林太郎への家族の愛情は、降りそそぐ星のようであった。
つぎのような話が残っている。
ある日(註1)、夜更けてから、用事のある人が横堀にあった森の家の辺を通りかかると、あかあかと灯がともっていて、人声もする。もしや病人ではあるまいかと覗いて見たら、生まれたばかりの赤ン坊がむずかるのをあやすというので、家の者がみんな起きて騒いでいるのに呆れたという。

二

澄んだ眸がじっと見ている。瞬きもしない。その顔がふっと笑った。

「峰子、林太郎が笑うたじゃ」

清子がはずんだ声を出すと、峰子が急いでやってくる。

赤ン坊は笑い止んでいる。

「あら、この子はお母さまだけに笑って、私には笑ってくれん」

峰子は不満である。

林太郎を産んだとき、峰子は十六歳の若さであったから、赤ン坊の世話はほとんど祖母の清子がした。赤ン坊は自分が頼るべき人を本能的に知っている。

火のついたように泣いているときでも、清子が抱くと、林太郎はピタッと泣き止んだ。清子は孫がいっそう可愛いくなった。

「利口な子じゃ。間違いのう森家にふさわしい立派な医者の後取りになってくれるじゃろう」

この孫のために百までも生きていなくてはなるまい、と清子は思うのだった。

「林太郎、そうわがままばかりいうんじゃありません」

まだひとりで立つことができず、部屋を這い回っている林太郎に峰子のきびしい言葉が飛ぶ。

「この家はご典医の家柄ですよ、ご典医といえば武士と同じことです。男らしく聞き分けなさい」
峰子は清子と違って、林太郎の母としての責任を強く感じている。この子を何が何でも一人前の医師に仕立てあげなくてはならない。それは並大抵のことではない。これからの生涯をこの子に捧げるほどの気持ちで、この子といっしょに歩んでいこう。
「分りましたか、林太郎」
その峰子にこたえるように、這うのを止めた林太郎が、顔を上げてじっと母親を見ている。
峰子は、ふと通い合うものがあるのを感じた。
〝この子は、私のいうことが分っているのかもしれない〟
気持ちが昻じてきて、峰子は夢中で林太郎を抱き上げた。乳をふくませると、強く吸い始めた。快い痛みが走った。峰子は無言で林太郎を抱きしめた。

林太郎に課せられた責任は重い。
森家の伝統を継いで家名を挙げ、父母が老年に達すれば扶養することである。
母の峰子は林太郎がそれ以上の人物になることを期待している。
それを知ってか知らずか、林太郎は母の手の中で安らかな寝息を立てている。

三

「林太郎、いっしょに帰ろう」
勇之進が声をかけた。
勇之進は藩の下級武士の息子で、林太郎といっしょに藩校の養老館に通っている。頭がよく、つねに林太郎と成績を争っている。二人はどこか気が合って、いつもくっついている。
「面白いところへ連れていってやろう」
「面白いところ?」
林太郎は興味を示した。
世の中の動きをよく知っていることでひそかに敬意を抱いている勇之進が、何を教えてくれるのだろうか。
「行ってみるか」
「うん」
林太郎は一も二もなく同意した。
二人は並んで養老館を出る。
勇之進は、家へ帰る時とは違う道を急ぎ足に行く。
「どこへ行くんじゃ」

林太郎は、ふと不安になった。
「乙女峠じゃ」
「面白いというのは何が面白いんじゃ」
「行って見りゃ分る」
勇之進はグングン足を早める。
乙女峠のどこに面白いところがあるのだろう、と林太郎は想像をめぐらした。
峠の上からの津和野の眺めがきれいだというのだろうか。花の咲いた原でもあって、そこへ二人で寝転ぼうとでもいうのか。あるいは、峠のどこかに妙な者がいるのだろうか。そうかもしれない、と林太郎は思った。
「峠に誰かおるのじゃろう」
「おお、そうじゃ」
勇之進が驚いたように林太郎を見る。
「誰がおるんじゃ」
「それが、わしにも分らん。お前、知っとるんか？」
林太郎は首を強く横に振った。
光琳(こうりん)寺の塀の外で勇之進が立ち停まった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com